

# 『人』と『認知症』と向き合うということ

～響き逢いの日常から～

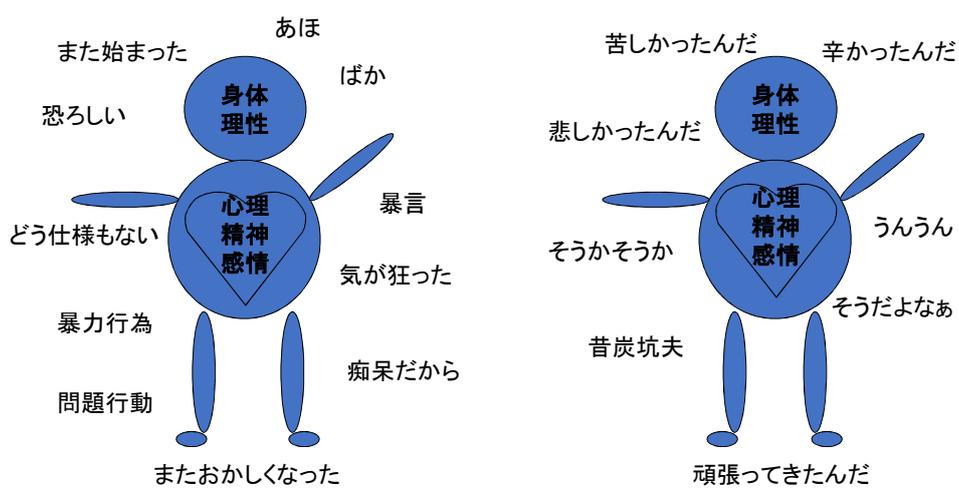
Nao

## 今日のお話しすること

1. 出逢い      ルームウォーカーとお爺さんと僕
2. 覚醒      めちゃくちゃな化粧
3. 失恋      僕の奥さん
4. 気づ期      ゴミとお爺さんと僕
5. 成熟期      生ききる傍で
6. 一貫性      声なき声を聴く
7. ライブディスカッション

# 出逢い

私たちは身体（肉体）・精神（心）・魂（本能・感性）で  
感じ生きている存在だとすると



## 『私の不思議』

- ・軽度の定義～自分たちの思うようになる認知症の人、若しくはおとなしい何も問題のない認知症の人
- ・重度の定義～自分たちの思うようにならない認知症の人、若しくは問題のある認知症の人
- ・問題の有無の定義～自分たちが安心（思い通りになる人、自分たちの言うことを聞いてくれる人、静かに一日黙って座ってくれている人、自分たちがやってもらいたい役割を気持よくやってくれる人、そもそも帰るなどと言わない人等々）してみれるかみれないかの違い

## 人の姿と認知症

- ・姿の捉え方からスタート  
どんな姿かと思っているかがその後の関わりや支援（介護・ケア）に影響する

**視点（姿の捉え方）は認識を創造し  
認識は経験を創造する**

覚醒

めちやくちやな化粧

失恋

僕の奥さん

気づ期

爺様の野望

# 爺様からの手紙

朗読します

## 『手紙』 ～ 願い ～

- 前略 専門職の皆さんへ
- 私、88歳、男、アウルで生活して5年が経つ。これは、私の叫びというか、世の中に言いたい願いでもある。私は、ゴミを集めるのが使命？というか、あんた方介護する人の間では「収集癖」と言うやっかいな事のようなのだが、私にとっては趣味というよりリサイクル活動のようなものなのである。そんな集めたゴミを勝手に捨てられてしまえば、誰だって嫌な気持ちになる。ちょっと怒ったら、あんた方は「暴言」だの、「暴力行為」だのと言う。今回は、そんな趣味が高じてもの作りに発展していった話を、家（うち）の社長を通してお伝えしてもらおうことにした。

## 今この国で起っている介護現場の実態

- 一般的に世間では私のような年寄りを「ボケ」老人という。専門的には「認知症高齢者」って言うみたいだ。しかし、私は叫びたい。そんなボケ老人にしたのは、あんた方介護をする人ではないか。社長にもよく言う。私達にだって考える力はある。感じる力だって、行動力だってある。それを、全部あんた方、介護をする人がやってしまう。年寄りを大事にするということを、あんた方は履き違えている。大事にするということは、何でもかんでもやってあげることじゃない。人間楽を覚えるとそれに慣れてしまうものである。それは、私達の弱さでもある。それは認める。ましてや年寄りだ。そんな機会を奪わないで欲しい。

## どう生きてきたか／自分の身体に起っていること

- 私は、昔ブリキ職人として働いた。自転車屋もやった。自転車の修理の手際よさを気に入られて、国鉄でも働いた。退職して、町内会の仕事をした。在家の坊主もやってる。今でも葬式でお経も読む。なんでも自分にできることはしてきた。でも、年を取ってくると記憶が定まらなくなってしまうことが、度々起きるようになった。心臓もいいほうじゃない。フランドルテープって言うのを貼っている。目も片方はほとんど見えない。世間で言う、身体障害者だ。手帳もある。それが、ある日突然「ボケ」だと言われて見れ、びっくり仰天だ。それでも、自分でいたいという願望は今でもなくなるらない。

## 主体性と選択性の実現

- 社長が、ブリキ職人だった頃の道具を持ってこいと言うので、部屋に持ち込ませてもらった。その道具を使って、あらゆる物を創作した。もちろん、ゴミでだ。今日は、その一例を紹介する。社長にはいつも言っている。全国に広めて欲しいと。こんなにできる年寄りも、日本には五万といることを。伝えて欲しい。私達にできることを奪わないで欲しい。伝えて欲しい。私達にも感じる力はあることを。伝えて欲しい。私達にも、行動力があることを。できれば、あなた方の専門性を、そのことに生かせるよう研究して欲しい。いつかあなた方もそこにたどり着くだろうから。

## 共有／共感の実現

- 今日は、ひとつ皆さんに私が創作した物を作ってもらおうよう社長にお願いした。それを是非お土産に持って帰って欲しい。全国にいる人たちに知らせたい。それが私の願いだ。こうやって頑張っている年寄りもいるということ。  
お手紙読んでいただいて、ありがとうございました。皆さんも御身体ご自愛下さいませ。
- (この手紙はご本人と協同で考え執筆したものであり、内容及び発表することについては、本人の同意を得ているものであります)

爺様の主張を実体験してみます？  
～ある作品づくりからの主張！～

『こういうことをやっているとボケてる暇がないんですよ』

**爺様曰く**

**『これはボケに効くんです。  
学会でも発表されているんです。  
私はテレビで見たんですから間違いない！』  
確かに！効く！**

## 爺様の遺言

- 『投げる物の中に宝はあるんだよ』
- 『空き缶で作っている時が一番楽しいね。頭で考えなくても手が動いちゃってるもんだから』
- 『何でも出来上がるまで努力してみる事だね。失敗したらどうして失敗したかを考えてみて、失敗してわかるんだから。頭で考えたんではダメなのよ。あなたもやってみなさい。やってみる事が大事だね』
- 『人に助けられればね、自分も何かしなきゃならないという考え方になるはずですよ。何でもいいから人に喜ばれる事をしたいなと』

## 私たちのやりがいとは？

- 爺様で言えば
- 爺様の力（自治力）が十分に発揮されること
- そして爺様が最後まで生きぬくこと
- 爺様に対しどれだけの事をしたかではなく、彼の生き方にどれだけ心を込めたか

そのこと自体が爺様の喜びとなり、私たちの喜びとして感じられた時、本当の意味において相互に生きがいややりがいを感じることができる

コミュニケーションは  
するものではない

コミュニケーションは  
そこに在るものである

存在そのものが支援である

By おれ

## 3つの大切なこと

- ①『自分のことは自分ですること』
- ②『互いに助け合うこと』
- ③『社会と繋がっていること』

成熟期

# 一貫性

もしもし？  
何度でも言います

『の』から『と』へのすすめ

## 「認知症の人」への提言

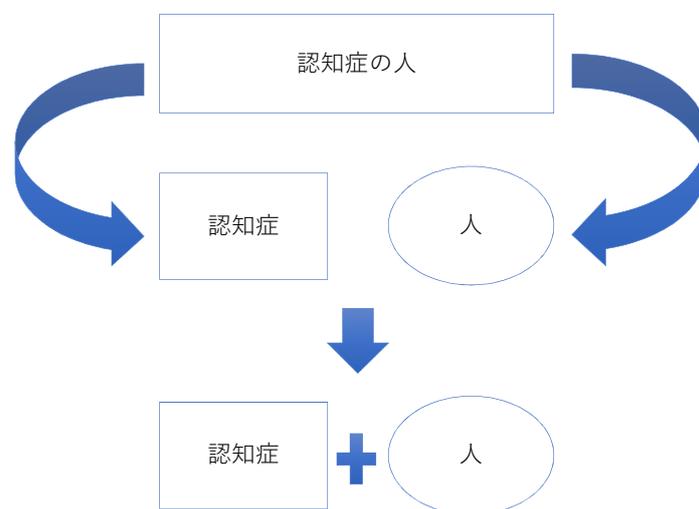
- 認知症のケアなのか？
- 人のケアなのか？
- 認知症の状態をケアする
- 人が生きることを支援する
- 認知症の理解
- 人の理解

それぞれ別々に考えてみる

別々に捉えた（考えた）上で  
足して考えてみる  
すると

認知症を持つ『人の姿』が見えてくる

## 『認知症』と『人』の図解



これまで から これから

### 認知症⇒人

- ⇒認知症の人・認知症高齢者
- ⇒認知症の宮崎さん
- ⇒便を壁に塗り付ける
- ⇒弄便行為
- ⇒つなぎ服

### 人⇒認知症

- ⇒認知症と人
- ⇒宮崎さんに認知症
- ⇒便を壁に塗り付ける
- ⇒便の処理が困難
- ⇒事前のアセスメントを充実
- ⇒生活のピンポイントの支援

『の』から『と』へ

『認知症の人』

『認知症』と『人』



認知症を通して人を一括りに捉える文化

人と認知症をそれぞれ捉える文化

「認知症」と「人」を理解するとは

1) 「認知症」を理解するということ

脳の障害によって起こる病気を理解する（専門職として必須の知識）

原因疾患の特徴を理解する（原因と臨床的特徴）

原因疾患別のケアのあり方を理解する

2) 「人」を理解するということ

性格傾向の理解：気質、能力、対処スタイル

生活歴を理解する：本人の人生の歴史を理解する（物語を理解する）

健康状態・感覚機能（視力や聴力等）の理解

その人をめぐる社会心理学的状況の理解：社会との関わり、人間関係のパターン

出典) 認知症介護研究・研修センター監「認知症介護基礎研修標準テキスト」 .48,ワールドプランニング.東京 (2015)

## 「帰りたい」

あなたはどうか対応しますか？

「帰りたい」⇔帰宅願望・帰宅欲求なんかじゃない

「帰りたい」って言う人がいます。「帰りたい」のは山々だけど、「帰れない」ことも薄々感じています。本当は、「帰れない」けど「帰りたい」という気持ちをただわかって欲しいだけなのです。みんな「帰りたい」でも「帰れない」。人は本当の気持ちを言いません。本当は「私の気持ちをわかって」「帰りたい」気持ちをわかってもらえなくて悲しいのです。そう言っているだけ。一度その気持ちを受け止めて心から聴いてあげて下さい。「帰りたい」という気持ちと、「帰りたくなる」私の周りの私の扱いに気づいて下さい。洗濯物をたたむことで誤魔化さないで下さい。料理をつくることで誤魔化さないで下さい。レクや療法をして誤魔化さないで下さい。ドライブや買い物で誤魔化さないで下さい。「帰りたい」気持ちの裏に耳を傾けて欲しいだけです。「帰りたいですね、わかりました」と一言でいいから、気持ちを受け止めて下さい。まずは「はい、わかりました」と、ただそれだけでいい、わかって下さい。

## 隠されているメッセージ

- どんな状態になっても『感性は最後までそこにある』
- 認知症によって表現しにくい『感性』『感情』を読み取る力が必要

ひとは  
どのような状態であっても  
感情・感性は最期まで  
そこに「在る」ものです

悲しみ・怒り・羨望・不安・愛

感性とは  
すでにそこに在るものだ！

By おれ

最後に一言

声なき声を聴く

声なき声に耳を傾けること

皆さんお疲れ様でした。  
ありがとうございました。